

在日コリアン二世・三世の二文化環境への態度とメンタルヘルス(1)

—文化的アイデンティティの自己認識に関する面接調査—

Attitudes toward a Bicultural Environment and Mental Health among Second- and

Third-Generation Korean-Japanese(1)

— Self-Cognition of Cultural Identity from an Interview Survey —

李 正 姫・田 中 共 子

LEE, Jung-hui & TANAKA, Tomoko

はじめに

1. 長期異文化滞在者における二文化環境への態度とメンタルヘルス

移民の受け入れの歴史が長く、人々の国際的流動性が高い西洋諸国では、異文化圏から移入してきて定住する、長期異文化滞在者の心理学的研究が蓄積されている。Berry, Kim, Power, Young & Bujaki(1989)による、カナダにおける移民の文化変容態度 (acculturation attitudes) の概念モデルはよく知られているが、そこでは移民の文化変容態度が4類型で捉えられている。①「文化的アイデンティティと特徴」を維持したいかどうか、②「ホスト社会とのよい関係」を維持したいかどうかという観点に、「はい」と「いいえ」の姿勢を想定して分類する。両方「はい」の移民は「統合」(integration)とされる。②のみ「はい」で①が「いいえ」は「同化」(assimilation)、反対に①のみ「はい」で②が「いいえ」は「分離」(separation)とみなされる。ともに「いいえ」なら「周辺化」(marginalization)とみられる。そしてそれぞれの度合いを数値化するため、カテゴリーごとに複数の項目群を設定した質問紙が作成されている。例えば、カナダにおける韓国系移民の友人関係に関する「分離」の項目として、“ほとんどの私の友達は韓国人で、なぜなら、カナダ人と一緒にいるより気が楽だから”などと尋ねられている。

Ward & Kennedy(1994)は、Berryらの調査項目では、母文化とホスト文化を二元的に捉えるモデルでありながら、アイデンティティは母文化、関係性はホスト文化に関する問いを中心に構成されているうえ、「伝統的なライフスタイルをやめてカナダのライフスタイルにしているか」など、設問に二者択一的な表現が用いられている点に問題があると考えた。そして両文化をより独立的に捉えて測定するため、同胞民族との類似度 (similarity for co-nationals) と、ホスト民族との類似度 (similarity for host nationals) を分けて、両文化をどれだけ取り入れて暮らしているか、具体的な認知と行動を自己評定させるほうがよいと考えた。この考え方に即して、Ouarasse & Van de Vijver (2005)は、オランダの二世移民を対象に、文化変容態度に関する質問紙調査を行った。オランダの生活習慣や出身文化の様子に合わせて、「ホストへの態度」と「エスニックへの態度」について、例えば「あなたはホストの食べ物が好きですか」と「あなたはエスニックの食べ物が好きですか」といったように、両文化に

関して同じ内容を問う構成で尋ねている。その結果、ホストへの評定とエスニックへの評定には有意な相関は見られず、両者が独立である可能性が示唆された。

文化移行者の出身環境と移入環境への態度をもとに、対比的な4分類を行うモデルは広く用いられており、異文化滞在者のメンタルヘルス研究でも使われている。Kh Krishnan & Berry (1992) は、インド系のアメリカ移民を対象に面接調査を行い、文化変容態度の4分類とメンタルヘルスとの関連を調べた。その結果、文化変容ストレスとの間で、統合は負の相関、分離と周辺化は正の相関が認められたが、同化は関連が見出せなかったと報告している。総じて移民は、移住国での永住者という身分を持つことから、母国との連帯感を放棄することになり、精神的困難を抱えると述べている。Ouarasseら (2005) は、展望論文の中で、文化変容態度と文化変容の結果との関係を調べた研究では、後者の変数として主に心理的な適応度合いをみているが、知見は一貫していないと述べている。例えばメンタルヘルスへの影響をみても、ホスト文化への同一視 (identification) が強いほうが抑うつ度合いは低いという報告 (Ghaffarian, 1987) がある一方で、より強いエスニックへの同一視 (identification) があると臨床心理的な適応問題が少ないこと (Ward & Kennedy, 1994) を報告した研究例があるという。

結果には総じて一貫性がないとしても、これは調査する移民集団や受け入れるホスト社会が多様なうえ、測定の内容や尺度の構成、測定する症状の重篤度などが一様でないことによるのではないと思われる。しかしエスニックやホストの集団への同一視は、排他的な次元上のモデルで捉えるより、独立の二次元を想定して解釈する概念モデルが、近年は支持される傾向にある (Ouarasseら, 2005)。それぞれへの同一視は異なる心理的機能を持っている、と考えるのが妥当だろう。

長期の異文化滞在者は、異文化環境において、生活習慣の再編成という外界との調整に加えて、文化的アイデンティティなど内心の混乱からもストレスが生じている。このため、メンタルヘルス的にはハイリスク集団となり得る要素を抱えているといえよう。二文化環境への態度は様々な測定が工夫されてきたが、それらがメンタルヘルスの度合いと有意に関連する可能性を、考えてもよいだろう。

2. 日本における在日コリアン

(1) 本研究の視点

本研究では、在日コリアンを対象に、エスニックとホストの二つの文化的環境への態度とメンタルヘルスに注目していきたい。そこで現在広く用いられている、エスニック文化や社会への肯定的・否定的態度、ホスト文化・社会への肯定的・否定的態度を組み合わせた4分類の考え方を、二文化環境への態度として採用したい。海外の先行研究では、こうした態度を測定する方法は一通りではないが、ここではまず「統合的態度」「同化的態度」「分離的態度」「周辺化的態度」を、広義のゆるやかな分類として想定し、探索的研究を通じて漸次的に概念の精緻化を図っていくこととしたい。

まず在日コリアンの研究の流れを、このテーマに示唆が得られるものを中心に、概観していく。総じて社会学的な研究が多く、心理学的な研究は希薄であり、精緻な測定や尺度化は乏しい。海外においては移民のメンタルヘルス研究が積み重ねられているが、在日コリアンに対しては、筆者の見る限

り、二文化環境への態度とメンタルヘルスに関する報告が蓄積されているとはいえない。ただし文化的アイデンティティや、ホスト文化の受容、母文化の維持に関する示唆などは見られるので、二文化環境への態度をある程度推測することはできるだろう。社会学的な背景を持つ研究の問題意識と、心理学的な研究が解明しようとする現象は必ずしも重なるとはいえないが、以下ではそうした視点の違いを鑑みつつ、在日コリアンの研究例をひとまず概観し、そこから心理学的な示唆を探してみたい。

(2) 在日コリアンの経緯

韓国・朝鮮と日本との人の行き来は歴史が長いが、現代の日本社会で「在日コリアン」といった場合は、第二次大戦前後の経緯に焦点を当てた定義がよく使われている。谷 (1995b) は、「戦前・戦中の日本の植民地支配と、戦争直後の朝鮮半島の政治的困難のもとで、朝鮮半島から日本へ来た者とその子孫のうち、韓国・朝鮮籍を持っているか、もしくは、たとえ日本国籍を取得した後も自民族への一体感や帰属意識を抱きつつ日本に定住している人々」としている。福岡 (1993) は「植民地時代の強制連行か出稼ぎを機に日本に定住した人たち」と捉え、「植民地支配下での生活解体によって、渡日をよぎなくされた移住の経緯がある」と述べている。社会学的には近世の歴史的な流れに注目した捉え方が強調されているようだが、岩井ら (1995) は、「在日韓国人は移民者のような存在だ」とも例えている。心理学的な移民研究との連続性を見出せる可能性を、考えてもよいだろう。

(3) 在日コリアンにおける二文化環境への態度に関する示唆

在日コリアンの二文化環境への態度を直接調べた心理学的研究は見当たらないが、社会学的な示唆はみられる。まず一世の文化変容態度について、金 (1999) は、民族という枠組みのみを持って自分たちの存在を説明しようとした、と述べている。この点では、心理的には一世はホスト社会と距離を持ち、同胞との強い結びつきに支えられて生きる「分離的態度」をとっていた可能性が考えられる。

日本で生まれ育った二世・三世については、原尻 (1989) は、文化的に日本人に同化している面が強く、現実に文化変容を受けていると述べている。宋 (2001) は、在日韓国・朝鮮人の若い世代は、現代の日本の若い世代と同じ考え方や行動をする、と述べている。福岡 (1993) は、在日韓国人の面接調査から、二世・三世は、空気を吸うように自然に日本文化を吸収・内面化している、と述べている。これは、ホスト文化への合流が進んでいるという意味で、「同化的態度」に重なる部分が多いだろう。しかし、加えて出身文化への態度が肯定的なものであるなら、「統合的態度」の可能性もあろう。

福岡 (1993) は、祖国で成長し民族文化を自然に内面化した上で渡日してきた一世の同化と、日本で生まれ育った二世・三世の同化は、分けて考えるべきだと述べ、両者に同化的な現象が存在するとの認識を述べている。このことは、同化の質的差異を想定することで解釈できよう。つまりその意図や必然性は異なり、一世は生きていく手段としてやむを得ず同化したが、それは表面的、部分的に周りに合わせていたに留まるのかもしれない。二世以降は特別な努力を要したというより、むしろ自然に同化しているらしいことから、成育する際の社会化の過程でホスト文化の内面化が起きており、同化的態度が心理的にも完成している状態にあることを示唆しているように思われる。

林(2001)は、在日韓国人を対象とした質問紙調査で、二世・三世に対して、「母国に対する愛着度」と「日本への帰化願望」をそれぞれ評定法によって尋ねている。愛着に関する「非常に・かなり愛着がある」「どちらともいえない」「あまり・全く愛着を感じない」の3カテゴリーと、帰化に関する「是非・できれば帰化したい」「あまり・全く帰化したくない」の2カテゴリーを組み合わせて、回答者を6セルに分けている。続いて、愛着あり/帰化したい、愛着なし/帰化したい、愛着あり/帰化したくない、愛着なし/帰化したくない、の4セルの回答者のみを取りだして、両属志向、帰化志向、伝統志向、個人志向と名づけた。そして、これらは統計的に弁別はされたが、愛着と帰化の評定が片方のみ高い人に比べて、両方高い人や両方低い人の特徴はつかみにくかったと述べ、その上で、両方低い人たちには「個人志向」があるようだと論じている。両方低い人たちは海外へ留学したり、外資系企業に就職するなど、日本社会にとどまらない「移動」をすることがあり、差別的評価から自由になることを願っている人が多いと述べている。なお、愛着について「どちらともいえない」と回答したことによって、6セルから除かれて、上記の4分類に含まれない2セルに属した人たちは、全体の18.0%にのぼった。その彼らの特徴づけが不明という問題は残る。だが少なくとも愛着も帰化志向も「低い」人たちが、両文化に距離をとっているという意味では、「周辺化的態度」に重なる部分を持ったカテゴリーと解せるだろう。

「周辺化的態度」を示唆する知見は、他にも見つかる。福岡(1993)は、二世・三世へのインタビュー調査から、独自の4類型(帰化志向、祖国志向、共生志向、個人志向)を提唱した。個人志向が一つの類型として立てられ、「日本社会における自己の生育地への愛着心が薄く、在日の歴史へのこだわりも少ない人たち」とされている。その特徴は、①個人的成功や自己実現を追求し、②そのために「移動」をし、③対人関係面では民族・国籍といった属性にとらわれず、④業績自体を評価する“個人主義的”な考え方を持っている人々との付き合いに解放感を抱くこと、とされている。両文化のカテゴリーを離れたがるという点で、これも「周辺化的態度」と重なる発想といえよう。

Berryら(1989)の周辺化は、「文化的アイデンティティと特徴の維持」「ホスト社会とのよい関係の維持」とともに否定するという定義に過ぎず、代わりに何を志向し、何を求めるのかは未詳のままといえる。またBerryら(1989)は「母文化的アイデンティティ/(母文化に関わる)文化的アイデンティティの保持・ホスト社会との良好な関係」を尋ね、心理的な自己認知と他者との関係性という社会心理学的な変数を測定しているのに対し、林(2001)は「母国に対する愛着度・帰化願望」、福岡(1993)は「日本社会における自己の生育地への愛着度・朝鮮人の被抑圧の歴史への重要度」を測定し、社会的な選択や認識に焦点を当てている。こうした違いはあるが、Berryらの区分した「母文化アイデンティティやホストとの関係性に消極的」な人も、後者らが見出した「日本の生育地にも民族的単位からも距離をとる」人も、「周辺化的態度」に含まれる可能性が高いだろう。その中で、「個人的成功を追求する」「上空に飛翔する生きかた」を望む人たち(福岡,1993)が、さらなるサブカテゴリーを構成する可能性が考えられるだろう。

「周辺化的態度」のサブカテゴリーとなる可能性のある概念は、他にも見いだされる。辻本ら(1994)は「親と子が見た在日韓国・朝鮮人白書」という書籍の中で、「日本社会の中で・・・」という文章完成法の問いを設け、以下のような記述を得ている。ある40代の親は、子供世代に託す望みとして、在日韓国・朝鮮人である前に人間なので、一人の人間として生きていけたらいいのだが、と記していたという。他の親世代の中にも、今日の在日二世・三世は、新人種だ、国籍意識が低いとかそうした意識を持つことができない集団である、と述べたものがあったという。国籍意識の低さの指摘と、それに代わる捉え方として、より普遍的な「人間として」という表現を用いていることが注目される。

教育・文化人類学者の原尻(1989)は、在日朝鮮人が自分を「自由人・国際人・その他」で認識するケースが増加していると述べている。先の辻本ら(1994)による自由記述の報告の中には、集団カテゴリーに距離を置く考え方が紹介されている。「民族の自覚をもつことは大切だが、あまりに強い民族主義的傾向は、外国に居住しているものとしてはあまり好ましくなく、韓国人として過剰意識を持たなくてもいいと思うが、韓国人としてのプライドを持つことは大切だと思う」と書かれたものがあるという。教育社会学者の金(1999)は、従来は民族という枠組みが個を抑圧する機能を果たし、集団的アイデンティティが誇示されていたと述べたうえで、今は“個人としてのアイデンティティの尊重”が主張され、「在日朝鮮人としての自分」ではなく、「個人としての自分」をみてほしい、と感じる世代であると述べている。従来は在日コリアンが民族カテゴリーをかなり強調してきたこと、今日はそれには依らない者もみられるようになってきたことが読み取れる。

今日の在日コリアンの二世・三世において、「国籍に拘らない」傾向(宋, 2001)がみられるという指摘は、「周辺化的態度」の概念的な解明という課題と結び付くだろう。彼らが二文化の二者択一的な選択でも両文化の統合でもなく、それらとは異なる態度として、“個人”“人間”“自由人”“国際人”などとして生きる、新たな志向性を持つならば、Berryら(1989)のいう周辺化を、この特徴を含めて再定義できるかもしれない。何らかの価値や意味を込めた積極的な選択なのか、他のカテゴリーに属さない人たちの消極的な選択なのかは定かではないが、これを仮に「自由人的態度」とし、二文化カテゴリーからの脱却を意図するカテゴリーとして、捉えなおす可能性を検討してみたい。

2. 本研究の目的

二文化環境への態度とメンタルヘルスのかかわりの解明を視野に入れ、本研究ではその第一段階にあたる初期的調査として、二文化環境への態度について探索する。「二文化環境への態度」は、先述のように概念的には4セルモデルを想定し、具体的な測定項目としては、「1. 文化的アイデンティティの自己カテゴリー付け」という自称のあり方と、本人が認識する「2. 二文化環境とのかかわり方」を尋ねる。これらを測る理由は、個人の内的及び外的な志向性の両方から測定を行うためである。在日コリアンは、自分が何人であるか自分のアイデンティティを一生懸命探している(在日本大韓民国青年会 2009)とされ、彼らの自己像は興味深い問いといえる。一方、海外の移民研究では、ホスト社会やエスニック集団との関係から、メンタルヘルスを説明しようとする試み(Berry & Kim, 1988)

がみられる。個人の社会性と内的なありようは、深くつながっているものとみられており、在日コリアンにおけるその関連は興味深い探求主題になり得るだろう。

「1. 文化的アイデンティティの自己カテゴリー付け」は、個人の内的な心理状態をどう認知しているかを尋ねるものである。二文化の間で文化的存在としての自分をどう見なすか、代表的なカテゴリーを設定した中から、自称像を選択してもらって測定したい。「2. 二文化環境とのかかわり方」は、二つの文化と個人との関係の持ち方を、内的及び外的な観点から問うもので、Berryら(1989)の考え方を参照しながら、在日コリアンにあわせた内容を尋ねることとしたい。尋ね方としては、ホスト社会での対人関係や母文化の継承意欲などを自由に述べてもらう、半構造化面接を行なう。移民を対象にした海外の心理学的な実証研究では、内在化された価値観などの文化的アイデンティティや、関係性の形成などの適応方略に焦点を当てての尺度化が試みられ、その度合いが測定されている。そして1980年代のBerryらの研究以来、母文化環境とホスト文化環境の両方を測定の対象として、二元的に捉えるモデルが注目されている。

本研究では、基本的に二元モデルの考え方を採用するが、「周辺化的態度」の部分をも、より詳しく調べておく必要があると考えている。「周辺化的態度」は、過去の心理学的モデルでは、単に両文化への志向性が低いとされ、必ずしも十分に解明されてこなかった。しかし在日コリアンにおいては、世代進行につれて母文化の強調から個人的特性の強調に向かう動きが指摘されている(福岡, 1993; 林, 2001)。そこで、両文化の志向性を必ずしも強く持たない生き方に、積極的な意味が与えられていたり、代替的な価値観が潜んでいたりする可能性を、新たに考えてみたい。

本稿では「周辺化的態度」を「自由人的態度」として再定義し、その詳細を把握した上で、今後の研究展開として態度の尺度化に組み込みたい。すなわち従来の測定方法では、周辺化の人々は両文化への志向性が低いという以上の定義ならず、「自由人的態度」の度合いを測定するには不足だろう。その概念構成を解明して、質問項目を考えていく必要がある。

山崎・平・中村・横山(1997)は、在日アジア系留学生を対象とした心理学的な調査において、「自分の民族的立場を自分の言葉で書いてください」と自由記述で求め、さまざまな回答を得ている。そして少数ながら、「地球人」との記載を得たという。在日ブラジル人の子供たちを対象とした教育学者の調査(光永・田淵, 2002)では、「自分は何人?」と自由記述で問われて、「単純な日本人でもない、ブラジル人でもない混血だと思う」「日本人かな」などと答えている例があるという。自己カテゴリー付けを問う聞き方をすれば、自分の内的なアイデンティティの捉え方を知ることになるだろう。心の内的なバランスを問う聞き方をすれば、心理的な自己評価をたどることになるため、メンタルヘルスとの関連がより強く反映される可能性を考えられよう。

ただし、全くの自由記述では回答のカテゴリーが不明瞭になることが懸念される。本研究では、カテゴリーを呈示して選択してもらいつつ、二文化への考えや姿勢を自由に語ってもらう半構造化面接の形で、彼ら自身の言葉で二文化環境への態度を表現してもらおうこととしたい。具体的には、「自分の

アイデンティティの状況を一言で言ったら」と尋ね、「統合人、日本人、韓国人、自由人」を提示して、選んでもらうという方法を用いる。こうして「自由人的態度」を明確に選択肢に含めた場合、4つの態度がどう選り採られていくのかをみていく。

「2. 二文化環境とのかかわり方」では、Berryの文化変容態度の質問の考え方をもとに、二文化との付き合い方を問う。在日コリアンにおいて注目されてきた事柄、例えば帰化の意思や本名の使用、親友の国籍などを入れて、具体的に尋ねたい。日本文化と韓国文化の両方への態度を尋ねるが、母文化とのかかわり方が変容しつつあるとの知見をうけて、母文化に関わる部分をより細かく尋ねる。

続いて自称カテゴリーと二文化環境との関わり方が、どの程度整合するかをみる。例えば、韓国文化が色濃い生活をしていたら、韓国人カテゴリーが自称されるのだろうか。そうでないなら、自称は単なる二文化環境とのかかわり方の反映ではないことになり、どのような意味合いから自称が選択されるのかが、興味深い問いとなろう。また、個人としてのありようを尋ねたとき、選択肢の一つに「自由人」を呈示したなら、それは韓国人や日本人のカテゴリーよりも選好されるのだろうか。その個人の家庭環境や周囲の人とのかかわり方、二文化へのストレスの認知はどうなっているのだろうか。設定された4つのカテゴリーをどう選ぶかが、二文化環境とのかかわり方とどうつながっているのかを探りたい。

以上を研究上の問いとして、本研究では、自由人の概念構成を探りながら、「1. 文化的アイデンティティの自己カテゴリー付け」と「2. 二文化環境とのかかわり方」、すなわち自称カテゴリーとホスト文化・エスニック文化との付き合い方が、いかに関わるかを検討する。

方法

1. 調査対象者 在日韓国人11名（男性4名・女性7名）。筆者の知人を通じて、縁故法によって依頼した。研究の意図を説明したところ、全員が協力を承諾し、面接に応じてくれた。世代構成は、二世が3名、三世が8名であった。年齢は、20代が3名、30代が3名、40代が2名、60代が3名であった。

2. 調査時期 2009年8月中旬。

3. 手続き 一人につき30分程度の半構造化面接を行った。語りは、メモをとって記録した。あらかじめ用意した質問をたどっていったが、話しにくそうな問いは飛ばしつつ、差し支えない範囲で話してもらった。全員、日本語で面接を行った。

4. 面接のガイドライン 答えやすさに配慮して、以下に示す①から⑭を順に尋ねていった。なお、⑨は「文化的アイデンティティの自己カテゴリー付け」（自称項目：*印）を尋ねたものである。①～⑧と⑩～⑭は、「二文化環境とのかかわり方」を問うもので、Berryら（1989）において、個人内の文化的アイデンティティの項目をもとにしたもの（個人内項目：◎印）と、周囲との関係の項目をもとにしたもの（関係性項目：○印）から成る。面接においては、インフォーマントには、これらの問いに対して自由に考えを述べてもらった。

〈尋ねた事柄〉 上述の記号を用いて項目の意図を示しつつ、具体的に尋ねた事柄を以下に記す。①日本人の友達と付き合い時と同胞の友達と付き合い時とで、付き合い方を変えるかどうか (○)。②韓国文化を異文化のように感じるか(◎)。③日本文化と韓国文化の違いでストレスを感じることはあるか (○)。④韓国文化を引き継ぎたいと思うか (◎)。⑤家で韓国語を使うか (◎)。⑥あなたの家では韓国人として教育を受けたか、日本人として教育を受けたか (◎)。⑦日本に帰化したいと思うか (◎)。⑧日本に対するイメージは (○)。⑨自分のアイデンティティの状況を一言で言ったら、自分はどれだと思うか (統合人・日本人・韓国人・自由人を説明しながら示し、選択を求めた) (*)。⑩私はやっぱり韓国人だなと実感する時はいつか (◎)。⑪韓国に対して、日本に対して愛国心はどれぐらいか (◎)。⑫私はやっぱり日本人みたいだな、と感じることはあるか (◎)。⑬通名と本名と、どちらの名前を主に使っているか (◎)。⑭親友や、より深い話をするのは、日本人と韓国人のどちらか (○)。

具体的な質問項目の選択については、以下のように考えた。

〈文化的アイデンティティ〉 韓国語 (⑤) は、「母国語がしゃべれれば自意識に目覚めたとき何かの手助けになる」(辻本ら, 1994)、「母国語ができないことを恥ずかしいと思う」(在日本大韓民国青年会, 2009) といった指摘があるため、母語の継承が重視されるという観点から尋ねた。母文化に接する場としては家庭が重視されていることから、家庭教育 (⑥) について尋ねた。在日コリアンが、「母文化の継承とホスト文化の受容という二重の課題を抱える」との指摘(李・佐野, 2009)を受けて、母文化の継承意欲 (④) を尋ねた。ホスト文化の受容は、日本人だと思う時 (⑫) を尋ね、母文化の内在化を尋ねる意味で、韓国人だと思う時 (⑩) を尋ねた。ホスト文化への同化的な受容は、韓国への異文化感 (②) で尋ねた。海外の移民研究で注目されてきた心理的な要因以外に、語学や愛国心などのエスニシティに関わる基本的な要因と、在日コリアン研究でしばしば取り上げられてきた、帰化 (⑦) や名前 (⑬) という外的な手がかりについても尋ねた。例えば、「母国に対する愛着と帰化願望は母文化アイデンティティの重要な構成要素である」(林, 2001)、「在日外国人のエスニック・アイデンティティを理解するにあたり、名のりへの注目が取り上げられている」(竹尾・矢吹, 2006) といった指摘がある。

〈周囲との関係〉 対人関係面では、親友 (⑭) と人との付き合い方 (①)、環境面では、日本イメージ (⑧) と二文化間ストレス (③) を尋ねた。

5. 分析

二文化環境への態度に関して、インフォーマントがアイデンティティに関する4種類のどれを選択したかに注目し、続いて語りの内容がそれとどのように対応するかを整理した。

結果と考察

1. 韓国人か日本人の一方を選んだ人

今回は、自分はどれだと思うかと問われて統合人、日本人、韓国人、自由人を呈示された時に、日本人を選んだ人はいなかった。韓国人を選んだのは、Jさん、Kさんの2名で、表1にその語りを要

約して示した。

表1 自称カテゴリーとして韓国人を選んだ人の語り (Jさん, Kさん)

	Jさん	Kさん	
自称項目	尊ねた事柄	Jさん	Kさん
	自称カテゴリー: 統合人・日本人 韓国人・自由人	韓国人, 前は同化今は韓国人として 宗教の影響で自由人もある	韓国人として
	使用名	—	—
個人内項目	母文化継承	—	—
	愛国心	対日本; 共存, 韓国; あり	—
	日本的なところ	日本人とは日本食に同胞とは 韓国食に, つまり皆と合わず・ 気づかうところ	揉め事があっても, まあ, よし とする
個人内項目	韓国文化の異質感	—	—
	帰化	いいえ, 娘が日本人と結婚して帰化し た, 親として後悔する, なにか鬱悶 気がざくしゃくする	いいえ
	家庭教育	韓国人として, 「韓国人だから恥ず かしいと思うことはない」	—
	韓国人 としての実感	食べ物	韓国語, 韓国教会
	家で韓国語	お母さんは使った	—
関係性項目	親友, 深話し	より深話をするのは同胞	—
	日本に対するイメージ	根性がわるい	日本人はつめたい
	対人態度の切り替え	—	ない
	—文化へのストレス	—	—

Jさんは, かつては日本人の中で生きてきて, 韓国人でいる必要性を感じなかった, そのころの自分は同化だったという。しかし今, 韓国人を選ぶ理由として, 友人が韓国人として生きているのを見て, 自分も韓国人として生きることにしたこと, 子育てが終わったことを挙げた。以前は, 韓国人のカテゴリーに違和感があったが, しかし, 自分の気持ちが変わったから, 人を見る目が変わったし, 韓国人に対する見方も変わったと述べた。そして世界平和を大事にする宗教の影響で, 自由人も, 自分の生き方の中に含まれている, という。日本人とは日本食, 同胞とは韓国食を共にしており, 一緒にいる人にあわせるという。子供が日本人と結婚して帰化した, 親として後悔する部分もある, 鬱悶気がギクシャクするから, と述べている。

Kさんは, (韓国人か日本人かという) 相手によって付き合い方を変えるのは, 自分を殺すことで疲れるでしょう, と言いつつ, 揉め事があつたらまあよしとする, と述べており, 日本的な付き合い方を行っていることが伺える。

この2名に共通し, かつ他のインフォーマントに見られなかった語りは, 日本への否定的イメージと同胞への強い心理的つながりである。日本のイメージは, 「根性がわるい」(Jさん), 「冷たい」(Kさん)と述べている。また, 「深い話ができるのは同胞」(Jさん), 「同胞は将来のことを共に心配してくれる」(Kさん)という語りもあった。

教育・文化人類学者の原尻(1989)は, 「民族的アイデンティティを感情として捉え, その感情が自己規定の本質的部分になっている」(pp.11-12)との見解を述べている。これは心理学的な実証はまだ得ていない仮説といえるが, ホスト環境への否定的イメージと同胞への信頼や愛着が, 韓国人として

の自己定義を強める可能性を示唆しているといえよう。

社会学者の福岡(1993)は、以下のように述べている。日本社会の差別と偏見から、在日コリアンは自分へのマイナスイメージを持たされるが、日本社会の差別にこそ問題があると気付けば、誇りをもって生きていこうと、母文化のアイデンティティを形成していくという。これも仮説ではあるが、差別への認識が母文化のアイデンティティを促すという解釈で、原尻と共通する見方といえる。

彼らの仮説が支持されるならば、日本イメージの悪化と同胞への愛情が共にあるとき、韓国人カテゴリーの自称は促されるかもしれない。出身国の文化的アイデンティティを排他的に保持することの心理的機能は十分解明されてはいないが、否定的環境の中で、母文化のアイデンティティが自尊心保持などの何らかのポジティブな機能を持つことは予想できる。

心理学者の川瀬・相良(2009)は、質問紙調査の結果、ニューカマーの韓国人の母親において、日本人が好きという感情があると、日本における異文化ストレスが低いことを示した。評価項目は、一時滞滞者が頻繁に出会う困難から組み立てられており、「外国人であることで特別視される」「日本人と親しい人間関係を作ることが難しい」などの項目が使われている。日本人が好きだと日本への親和性が高く、情動的側面での適応が達成できていると結論している。在日コリアンの二世や三世にこの知見が当てはまるかは未詳だが、ホストの人や文化への感情的評価が、メンタルヘルスにかかわりを持ってくる可能性は考えられるだろう。

今回、日本のイメージとして、「日本は閉ざされた国・閉鎖的」(Bさん)、「違うものを受け入れない」(Fさん)、「はっきりしない・めめしい」(Cさん)、「全体主義」(Dさん)、「冷たい」(Kさん)、「根性が悪い」(Jさん)が語られており、この6人においては、ホストの排他的な対応が認知されているといえるだろう。しかし、彼らが韓国人としての実感を持つときは、食べものか外国人登録証など、概ね外的な手がかりを通してである。ホストとの滑らかな対人関係や、二文化ストレスの弱さといった心理的な状態からは、内的にはホスト文化への受容が進んでいることが伺える。

文化受容の進行と、日本に否定的イメージを持つことや日本人カテゴリーの自称が選択されないことが、同時に見られることは、文化の受容と文化的カテゴリーの自称との心理的意味の違いを反映している。Berry(2006)は、母文化アイデンティティが安全に守られる環境であればホスト文化も受け入れやすいが、母文化アイデンティティが脅かされると、ホスト文化のアイデンティティも拒絶する傾向があると述べて、多文化社会において自文化が保証されることの意味を強調している。自文化を安心して保持できるかどうかは、ホスト文化のアイデンティティの認知に影響を与える要因となる可能性がある。この見方をとるなら、仮に在日コリアンが韓国アイデンティティが守られていないと感じた場合には、日本のアイデンティティをとることを潔しとしない傾向が生じるかもしれない。

Gong(2007)はバイカルチュラル・アイデンティティに関する研究を展望している。そこでは、エスニック・アイデンティティとナショナル・アイデンティティの関係を調べると、正の関係、負の関係、両者に有意な関係が見られない場合に分れるという。そしてホスト社会から受け入れられていないと

いう感情を持つ場合、この二者は負の相関を持つと述べている。ホスト社会の対応に関する認知は、滞在者のアイデンティティへの外的な影響要因といえるだろう。

2. 日本人と韓国人の両方を選んだ人

統合人を選んだのは、Eさん、Fさん、Gさんであった。Hさんは日本人か韓国人か場合によって違う、と述べた。表2に彼らの語りを要約して示す。

表2 自称カテゴリーとして日本人と韓国人の両方を選んだ人の語り (Eさん・Fさん・Gさん・Hさん)

尋ねた事例	Eさん	Fさん	Gさん	Hさん	
自称項目	自称カテゴリー： 統合人・日本人 韓国人・自由人	統合人	気持ちとしては自由人であり たいが、実際は統合人	統合人	その場によって違う、生活 パターンは日本的・日本文 化、血は韓国、例えば スポーツは韓国
使用名	本名だけ	通名	通名	本名	
母文化継承	したい	—	—	韓国文化でもなく日本 文化でもなく、韓国的な部 分が薄れていく、ミックス していくから	
愛国心	対日本：別がない、 対韓国：スポーツ応援	どっちにもない	韓国に対する愛国心 がもっと強い	一緒ぐらい	
日本的なところ	自分が日本人だと思ったことない	—	—	—	
個人内 項目	韓国文化の異質感	—	二文化は困難より 両方あっていい	ない	—
帰化	いいえ	いいえ、帰化しても血は 変わらない	いいえ	いいえ、しかし帰化したほ うが自然かな	
家庭教育	最初から韓国人として	日本人は本音を言わないと親が 言った	自然のまま、韓国人 としての教育に こだわっていない	—	
韓国人 としての実感	食べ物	食べ物、刺身のソースが韓国ス タイル	—	愛国歌を聞くとき、 ぐっとする	
家で韓国語	使う	使わない	使わない	使わない	
親友、深話し	ほとんど、日本人	同僚友達いない、同僚だと必ず しも信頼できるわけではなく、 かえってショックが大きいかも しれない	使い分けしていない	同僚友達いない、 日本人がほとんど	
日本に対するイメージ	—	違うものを受け入れない	特にない	常識的、まじめ	
関係性 項目	対人態度の切り替え	ない	ない、日本人の信頼する友達 にはすべてを言う	—	
二文化へのストレス	—	ある、コリアンタイム	ない	ある、日本人は控えめな言 い方、韓国人はストレート な言い方	

Eさんの語りを見ると、本名（韓国名）だけを使う、「あなたは韓国人だよ」など強く親から言われてきた、自分が日本人だと思ったことはない、と述べており、総じて韓国意識が顕著である。

Fさんは、通名（日本名）を使い、二つの文化があることは困難というより両方あっていいものと思う、と述べており、両文化を共に肯定する姿勢が強い。

Gさんは、日本名を使い、相手によって自然に使い分けをしているかもしれないと振り返る。いわば、対人態度について、おのずと二文化のスイッチングを行っている状態と推察される。家庭教育については、自分は子供に韓国人としての家庭教育をすることにこだわっていない、自然のままと語っており、韓国文化の継承をさほど強調していない。

その場によって違う、と答えたHさんには、アイデンティティのスイッチングを見てとることができよう。4類型の選択に際して、「その場によって違う、生活パターンは日本的・日本文化、血は韓国、例えば、スポーツ応援は韓国」と述べている。母文化を引き継ぎたいと思うかと問われた時には、「(自分の中では)韓国的な部分が薄れていく。韓国文化でもなく日本文化でもなく、ミックスしていくから」と語った。すなわち、韓国的な部分と日本的な部分が自身に混在しているとの認識を持ち、場面ごとに振舞い方を選択している。この意味で、二文化間でのスイッチングがみられる。

Gong(2007)は、Phinney & Devic-Navarro(1997)の「混合型二文化人 (the blended biculturals)」と「二者択一型二文化人 (the alternative biculturals)」という概念、すなわち二文化のアイデンティティ間に衝突がなく統合しているタイプと、二文化アイデンティティを分離して切り替えるタイプという二概念を紹介している。今回の知見を当てはめるなら、スイッチングが滑らかなら前者、切り替えに違和感や乖離感が強ければ後者と判断できるだろう。Gさんは、使い分けに伴う自然な感じを述べ、Hさんは、二文化への依存を肯定的に捉えていることから、二人とも前者に近いのではないかと推測される。

社会学者の福岡(1993)は、在日韓国人の若者150人あまりにライフヒストリーの聞き取り調査を行い、以下のような印象を述べている。「彼らは日本人の世界にも同胞の世界にも無理なく適応している。二つの自己を意識的に“使い分け”しているのではなく、“その場の雰囲気ですっと適応している感じ”だという。こうした印象が、自然さを伴う使い分けが成立していることからみるとみるなら、この若者たちのスイッチングもまた、今回のGさんやHさんと同様に、上記の「混合型二文化人」を示唆するものだろう。

3. 脱文化的な選択をした人

両文化を統合したりいずれか片方を選択するのではなく、いずれにも当てはまらないという答え方をした人が4人いた。表3に彼らの語りを要約して示す。

表3 自称カテゴリーとして脱文化的な選択をした人の語り (Aさん・Bさん・Cさん・Dさん)

尋ねた事柄	Aさん	Bさん	Cさん	Dさん
自称項目 自称カテゴリー: 統合人・日本人 韓国人・自由人	自由人	自由人	自由人	おれ人。在日はノーアイデンティティが多い
使用名	本名	高校までは通名、今は本名 自分の本当の名前だから	日本名をもっていない	学生の時までは通名 で今は本名
母文化継承	特に、なぜなら自由人だから	したい	実際、教えている	教えている
愛国心	全くない。例えば竹島一ただの島だろう。地球のものだろう	5対5	どちらの国も好きだし嫌いでもある	5対5
日本人的なところ	性格、価値観	ファッション、韓国旅行を海外旅行として捉える	自分は自分、国籍は二の次	日本語しかできない、日本に住んでいる。韓国旅行を海外旅行として捉える
個人内項目 韓国文化の異質感	ない	言われたら意識する	ない	ある、特に食べ物、しかし困難より楽しい
帰化	いいえ	いいえ	いいえ	いいえ、しかし帰化して当たり前だと思ふ
家庭教育	最初から韓国人として	韓国人としての教育だった、しかし3世ぐらいになると韓国人・日本人としてではなく人間としての生き方	韓国人として	韓国人として
韓国人としての実感	外国人登録証	外国人登録証、親の顔を見るとき	韓国に行ったとき	DNA、顔、親のことを思い出すとき、スポーツ応援
家で韓国語	使う	使う	使う	使う
親友、深話し	主に、日本人	どっちともする	どっちともする	国籍関係なくどっちともする
日本に対するイメージ	時間厳守	閉鎖的、時間厳守	あいまい、めめしい、はっきりしない	全体主義
対人態度の切り替え	ない、国籍ではなく人間として	ない	ない	ない
二文化へのストレス	ない	ない	悩んだことあり	ない

「自由人」を選択したのは、Aさん、Bさん、Cさんであった。Dさんは、選択肢にはない「おれ人」と答えた。彼らは日本人や韓国人の片方、あるいは両方のアイデンティティを選択することをしていない点で共通している。

この4人の語りには、共通して脱カテゴリー的な表現がみられる。Aさんは「特に、母文化を引き継ぎたいと思わない」「竹島、ただの島だろう、地球のものだろう」「国籍ではなく人間として付き合いたい」と述べている。Bさんは「人間としての生きかた」、Cさんは「自分は自分・国籍は二の次」、Dさんは自分を称して「おれ人」「ノーアイデンティティ」という表現を用いている。

この4人以外に、脱カテゴリー的な語りがわずかに見つかる人は、JさんとIさんだが、最初に他のカテゴリーを選んだうえで、付加的に自由人に言及したに過ぎない。Jさんはまず韓国人を自称したが、自由人の部分もあると述べた。これは一部自由人的な韓国人、という自己定義とみなせる。日本人・韓国人・統合人のカテゴリーの選択と、自由人の選択が両立するのか、これらが独立の概念なのかは、今後検討していく必要がある。

Iさんは、カテゴリーを問われて、無回答であった。そして韓国にも日本にも弱い意識しかないと尋ねたところ、そうだと答えた。積極的に自由人を自称するケースではなく、二文化アイデンティ

ティの弱さで定義される, Berryら (1989) のいう意味での周辺化と解釈できるかもしれない。ただしBerryは文化的アイデンティティの弱さは測定したものの, 自由人という発想や主張の有無は測定しておらず, 彼の測定した周辺化に自由人が含まれたのかどうかは, 厳密には判定できない。

自由人を自称した3人と, おれ人を語った1人に共通していて, かつ他の7人にはみられない特徴は, 「本名を使う, 韓国人として家庭教育を受けた, 家で韓国語を使う」の3点が揃っていることである。この4人は, 韓国文化により濃く触れながら育つ環境にいたといえる。先に見た, 韓国人を選んだ2人(Jさん, Kさん)には, この三点は揃っていない。この4人は, 社会環境には日本文化が満ちていても, 家庭環境には韓国文化が満ちている環境に育ち, 他のインフォーマントに比べると両環境の乖離が比較的大きいと予想される。仮にそれが心理的葛藤をもたらすのなら, その解消手段として脱カテゴリー的な「自由人」の志向が促される可能性を, 考えられるかもしれない。

この解釈を支える見方は, 教育社会学者の金(1999)の報告に見られる。ある在日韓国人の語りとして, 「在日朝鮮人としての自分」ではなく「個人としての自分」を求めていること, そして外部からの期待や要求に応えるものとしての「在日朝鮮人」ではなく, もっと自発的で気持ちの中から沸き起こってくる「こうありがたい在日像」を求めている, という事例が紹介されている。田中(2003)の心理学領域の展望論文では, 三世に進めば脱文化が進み, 民族的な区分にはより執着しなくなり, 個人化の傾向がみられるようになる, とまとめられている。この見方に即せば, 心理的にも, 世代進行に伴って集団のアイデンティティよりも個人のアイデンティティに比重を置く自己認知が生じていくことは, そう不思議なことではないだろう。

上記のような解釈が可能だとするなら, 自由人やおれ人を自称したインフォーマントにおいては, 強い集団のアイデンティティによって自分を表現する環境にあっても, 個人のアイデンティティに注目したいとの動機付けが, 脱カテゴリー的な自称を促した可能性を考えることができるかもしれない。

さらに, 自由人を選択した3人とおれ人と称した1人は, 大きく分ければ二種類に分かれるように思われる。ひとつは普遍型の自由人とでもいうべき概念を示唆している。Bさんは, (自分には)韓国人としての家庭教育が行われたけれど, 三世ともなれば韓国人としてとか, 日本人としてではなく, 人間としての生きかた(が, 主になるでしょう), と語っている。またAさんは, 母文化を引き継ぎたいと思うかとの問いに, 特にしたくはない, 自由人だから, と答えた。愛国心を問われた際には, 両国ともにまったくない, 例えば竹島はただの島だろう, 地球のものだろう, と答えている。「人間」「地球」など, 韓国や日本を越えた上位カテゴリーを用いたのは, この2名のみである。

もうひとつは, 個人型の自由人とでもいうべき概念を示唆するものである。Cさんは, 自分の中で日本人みたいなところはどこかと聞かれたとき, 「自分は自分, 国籍は二の次」と答えた。Dさんは, 自分のアイデンティティの状況を一言で表現すると, という質問に, 提示された4つの選択肢を用いず, 「おれ人」と答えた。「自分」「おれ」という一人称視点の答え方は, この2名のみである。上記の二つの型の自由人は, 社会的カテゴリーにいささか距離をとったところでの, 個人としての生きかた

を、別の角度から主張しているように思われる。

Berry & Sabatier(2010)は、フランスとカナダに在住する二世移民への質問紙調査で、ホスト集団から認識される被差別感の程度を、集団レベルと個人レベルに分けて比較している。個人レベルで認識される被差別感には有意差が見られなかったが、集団レベルで認識される被差別感、フランスの方がカナダより有意に高かった。すなわち、主観的な認知をみると、集団レベルでは差別があっても、個人レベルでは差別があるとは限らないことになる。一見矛盾する結果に見えるが、視点の個人化は、心理的にみれば、差別的な視線から距離を置く認知的な機制なのかもしれない。

4. 無回答の人

Iさんは、呈示した4つの選択肢に該当するものがない、と答えた。その語りを表4に要約して示した。

表4 自称カテゴリーの問いに無回答を選択した人の語り (Iさん)

	尋ねた事柄	Iさん
自称項目	自称カテゴリー： 統合人・日本人 韓国人・自由人	無回答
	使用名	通名
	母文化継承	—
	愛国心	どっちにもない
	日本人的などころ	—
	韓国文化の異質感	—
個人内項目	帰化	昔はしたいと思った、同胞と 関わってから、別にしなくても いいと思うようになった
	家庭教育	—
	韓国人 としての実感	韓国人はきつい 自分の性格もきついところ
	家で韓国語	使わない
関係性項目	親友、深話し	日本人
	日本に対するイメージ	—
	対人態度の切り替え	ない
	二文化へのストレス	ない

Iさんは、前は帰化したいと思ったが、同胞と関わってからは別にしなくてもいいと思うようになった、と述べている。韓国人を選んだ先のJさんも、同胞とのかかわりから同化を脱した、と述べた点では似ているが、その後のIさんの選択は、Jさんとは対照的である。韓国人志向は強くなるのではなく、弱まっており、結果的に両国のカテゴリーとも希薄化している。

Iさんは、自分の中の「韓国人だと思うところ」を聞かれたときには、自分の性格のきつさという心理的特性を挙げた。だが、こうした認知があっても、韓国人は自称されていない。アイデンティティを選ぶことは、「らしさ」を認めることとは異なる、独特の意味を付与する心理的な選択なのかもしれない。

Wiley, Perkins & Deaux(2008)は、二世の在米移民者に質問紙調査を行って、ホストが自分たちのグループをどう評価していると思うかと尋ねた。すると二世は、一世よりも否定的な評価をしており、しかも肯定的な集団イメージを保つために、そのホストからの評価を無視する傾向があったという。こ

れを当てはめれば、在日コリアン二世・三世が、自分たちの集団への、ホスト社会からの否定的な評価を無視する意味で、「自由人」や「無回答」を選択する心理的な機制も考えられるかもしれない。だが評価の無視とアイデンティティの無視が同一視できるかは未詳であるうえ、他のカテゴリーの選択者が、ホスト評価をどう捉えているかも、今回の反応からはわからない。

自由人の4人は、「韓国名のみ使う」「家では韓国語を使う」「韓国人としての家庭教育を受けた」と答えていたが、Iさんは「通名だけを使う、韓国名を使うことはない」「家で韓国語を使わない」と述べており、この点では家庭での韓国文化はそう強いものではないと解される。なおIさんは、日本人だと思ふところを問われたときも、無回答であった。

Iさんにおいては、日本に帰化する動機付けは低い。そして韓国人らしさは認識されているものの、強く韓国文化を保持しているともいえず、積極的に韓国人カテゴリーを採択するような志向性もみられない。「自由人」のカテゴリーをみて「これとは違う」と否定しており、脱カテゴリーを積極的に志向しているとは見せせない。これらのことから、両文化の意識が希薄で、二文化に関わるカテゴリーに多くの注意を向けていないという意味において、自由人のサブカテゴリーとして、「消極派の自由人」と仮称しておき、他の「積極派の自由人」と区別しておくのが妥当のように思われる。

消極派の自由人は、Berryら(1988)の原義にある周辺化の意味合いと、一部重なる部分がある。Berryは周辺化を、母文化が希薄化し、しかしその代わりにホスト社会に入っているわけでもなく、いずれの文化も弱く、混乱していて、どちらも支えになっていないと、否定的に表現している。だが今回は、聞き取れた範囲では、混乱や不適応の兆候は認められなかった。Berryら(1989)は、周辺化の実態を解明しきれてはいなかったが、しかし今回、「周辺化的態度」を「自由的態度」と捉えなおして尋ねたところ、そこには消極派の自由人と、積極派の自由人が含まれること、後者はさらに個人化志向と普遍化志向という二つのサブカテゴリーが含まれることが示唆された。下位分類が存在するということから、その適応への効果も、一様に否定的とは限らない可能性が考えられる。またこうした下位分類が、Berryら(1989)が対象としたカナダの移民にはなく、在日韓国人にのみ見られるのだとしたら、それが何によるものなのか、異なる心理機制を想定する必要があるのかどうかを、見極めていく必要があるだろう。

自由人の概念がどのようにして発生したのかについては、以下のような推測ができよう。Viruell-Fuentes(2007)は、在米メキシコ系移民を対象にインタビュー調査を行い、「親は家で母国語しかしゃべらず、私は非常にストレスだった」、「(私は白人でも黒人でもなく)どこに当てはまるのだろうか?」という語りを得ている。彼らは二文化の狭間で葛藤していることがわかる。

在日コリアンの一世は、母国で民族文化を内在化させた後に移動しており、ホスト文化への同化につとめたと考えられる。しかし二世・三世は、民族文化を保持しようとする親のいる家庭に育ち、家庭と社会の文化的環境のずれを抱えながら、いわば二重の社会化を課される。二文化のアイデンティティを持つことが心理的葛藤につながるのだとしたら、それを解消する方法として、脱カテゴリー的

に「自由人」を選んだり、「おれ人」を語るのかもしれない。そして集团的アイデンティティの強調に比して、重視されにくかった個人的アイデンティティを回復させているのかもしれない。

5. 周囲との関係

周囲との関係を、環境や対人関係の観点から尋ねた項目①、③、⑧、⑭への反応について、全インフォーマントの語りを眺めて整理してみたい。語りを見た限りでは、今回の11名のインフォーマントには、対人関係面で不適応と呼べるほどの不協和音はみられなかった。

ただし多少の葛藤の報告はあり、例えば二文化の狭間にいるストレス (Cさん、Fさん、Hさん)、日本の社会や文化への否定的イメージ (Bさん、Cさん、Dさん、Fさん)、否定的感情 (Jさん、Kさん)の語りがみられる。しかし、彼らは同時に、周囲と調和した関係を語っている。例えば、「どちらとも親友になれる」(Bさん、Dさん)、「日本人の信頼できる友達にはすべてを言う」(Fさん)、「日本人とは日本食に、同胞とは韓国食に、つまり、皆と合わせる、気づかう」(Jさん)、「もめごとがあっても、まあよしとする」(Kさん)などは、ホストとの親密な交流や結びつきを示唆している。

彼らは部分的な不協和音を感じることはありながらも、無難といえるほどに周囲と調和した関係を取り結んでいるようにみえる。社会学者の福岡(1993)は、在日韓国人二世・三世は生まれ育つ中で自然に日本文化を身に付け、空気を吸うように日本文化を内面化していくという見解を述べている。インフォーマントに見られるホストとの調和的な関係は、文化受容を反映しているものかもしれない。

6. 自称カテゴリーの心理的な意味

カテゴリーを自称することの心理的な意味について考えてみたい。本研究では、従来の研究にみられるように操作的定義で点数化した自己カテゴリーを査定したのではなく、自己の主観的判断による自己カテゴリー付けを尋ねた。その結果、語りとカテゴリーに必ずしも一致しない部分が見受けられた。例えば、Jさんは、韓国人を自称しているが、家庭内の韓国文化がさほど強いわけではなかった。Dさんは、「在日韓国人はノーアイデンティティ(の人)が多い、つまりそれは日本人に近い」「日本で暮らしながら韓国の儒教的思想を持つとすれば、うまくいかないだろう」と語っている。しかし日本人は選ばず、おれ人を自称している。

自称「～人」が持つ心理的な意味の解釈可能性の一つとして、自己表現であったり希望を表していたり、すなわち理想自己(日比野・村瀬・金子・本城, 2005)としての自己像を考えることができるだろう。韓国人や、積極的自由人・おれ人を選ぶ場合は、そのような人として生きていきたいという願望を表現したり、こうした人間だと自己呈示的に主張する意味があるのかもしれない。無回答、すなわち消極的自由人の場合は、そういった強い希望をもっていない状態といえる。理想自己をより明確に持っている場合は、より明確にその自己像を表現するかもしれない。しかし今回は、統合人を自称した人たちにおける理想自己は明確でなかったため、この点は説明がつかない。

心理学者の栗林(1995)は、自己呈示を「自分に対する認知を統制するために自分の情報を伝達する行動」と定義している。日比野ら(2005)は、日本人大学生を対象とした質問紙調査で、パーソナリ

ティに関する理想自己と自己呈示の評定値間に、正の相関を見出した。そして理想自己と現実自己間のズレが大きいと自尊感情が低いと報告している。在日韓国人の文化変容態度に関しても、こうした乖離がメンタルヘルスにかかわるのかどうかは不明だが、理想自己や自己呈示の観点からの検討は興味深い主題になろう。

7. 残された課題

本研究は、少数例への限られた聞き取りを整理しながら、続く研究への示唆を得ようとした、初期的な研究である。残された課題は、ひとつは、より大規模なサンプルにて属性別の検討を行いながら、得られた知見の検証を進め、海外の調査研究との異同を手がかりにして、移民の心理をさらに読み解いていくことである。今回の事例研究の知見によって、在日コリアンの集団をどこまで説明できるのか、変数間の影響関係はどうなっているのか、続く調査によって検討したい。

二つ目に、自由人の概念を精緻にし、旧来の周辺化との異同を解明することである。文献上取りざたされる自由人は、理念なのか実態なのか、下位分類はあるのか、類似概念との異同はどうか、Berryら(1989)のいう4セルカテゴリーとの関連性はどうかといった問いを、自由人を尺度化した上で解明していきたい。今回は質的な手法を用いた探索的な研究であった。測定手法としては、自由人を周辺化と置き換えて提示し、自称カテゴリーを選択してもらったが、こうした置き換えや単一選択といった測定方法の妥当性も考えていく必要がある。質問紙調査による量的検討からも、この問いへの手がかりを得ることができるだろう。今回は面接法を用いたので、カテゴリーの自己規定を比較的自由に探したが、その結果、自由人の中に積極派と消極派が見られたことから、「周辺化的態度」を全てポジティブな意味での「自由人」に置き換えてしまうことには慎重になるべきと考えられる。また自称という主観的なカテゴリー付けと、従来使われてきた評定尺度法や国籍選択などの客観的な指標との関わりも、興味深い問いであろう。複数の変数間の関連や、それぞれの規定因を探りたい。

三つ目に、自称されるアイデンティティと、測定可能な客観的基準によるアイデンティティを分離して、これらの心理的機能を探求することである。アイデンティティには、選択されるもの、意識されるもの、文化化の程度を表すものなど、多様な側面が考えられよう。メンタルヘルスとかかわりの深い部分を、探していきたい。

四つ目に、世代の要因を読み解くことである。今回は二世と三世のみにインタビューを行ったため、一世の心理機制については手がかりが得られていない。海外では一世や二世の研究は多いが、三世にいたる研究は希薄である。海外の一世・二世の移民を対象に蓄積された知見で、どこまで在日コリアンの二世・三世を説明できるかは未解明である。しかし世代が進むと、集団カテゴリーより個人を主張するようになる傾向は、共通するものと思われる。

五つ目に、上記と関連するが、海外の知見との異同を探っていくことである。世代の要因のほか、ホスト文化や民族文化のもつ文化特異的要因、社会的背景などの複合的要因が、彼らの二文化環境への態度やメンタルヘルスに影響を与えていけよう。ホスト側の要因とゲスト側の要因の影響を解明し

ていくことを通じて、ユニバーサルな知見を創出して行くことが課題といえよう。

【引用文献】

- Berry, J.W. (2006). Mutual attitudes among immigrants and ethnocultural groups in Canada. *International Journal of Intercultural Relations*, 30, 719-734.
- Berry, J.W., & Kim, U. (1988). Acculturation and mental health. In P. Dasen, J.W. Berry & N. Satorius (Eds.), *Health and cross-cultural psychology*. London: Sage. pp. 207-236.
- Berry, J.W., Kim, U., Power, S., Young, M. & Bujaki, M. (1989). Acculturation attitudes in plural societies. *Applied Psychology: An International Review*, 38, 185-206.
- Berry, J.W., & Sabatier, C. (2010). Acculturation, discrimination, and adaptation among second generation immigrant youth in Montreal and Paris. *International Journal of Intercultural Relations*, 34, 191-207.
- Gong, L. (2007). Ethnic identity and identification with the majority group: Relations with national identity and self-esteem. *International Journal of Intercultural Relations*, 31, 503-523.
- 原尻英樹 (1989). 在日朝鮮人の生活世界 弘文堂
- 福岡安則 (1993). 在日韓国・朝鮮人—若い世代のアイデンティティ— 中央公論社
- 日比野ゆかり・村瀬聡美・金子一史・本城秀次 (2005). 大学生における自己呈示・自己不一致・自尊感情の関連 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, 14, 113-114.
- ホフステード, G. 岩井紀子・岩井八郎 (訳) (1995). 多文化世界 有斐閣
- 李 原翔・佐野秀樹 (2009). マイノリティの学業達成・文化変容及びカウンセリングの役割に関する海外研究の動向—適応要因と教育支援のキーワードを通して— 東京学芸大学紀要 総合教育科学系, 60, 193-202.
- 林 一圭 (2001). 在日韓国人の生活と意識に関する研究—岡山県内在住の在日韓国人を中心として— 岡山大学大学院文化科学研究科博士学位論文.
- Krishnan, A., & Berry, J.W. (1992). Acculturative stress and acculturation attitudes among Indian immigrants to the United States. *Psychology and Developing Societies*, 4, 187-212.
- 金 泰泳 (1999). アイデンティティ・ポリティクスを超えて—在日朝鮮人のエスニシティ— 世界思想社
- 栗坂克匡 (1995). 自己呈示 名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科, 42, 107-114.
- 川瀬洋子・相良順子 (2009). 在日韓国人の母親における異文化ストレスと関連要因の検討—ニューカマー (new comer) の場合— 聖徳大学児童学研究紀要, 11, 19-26.
- 光永功人・田淵五十生 (2002). ブラジル人の子供たちは、どのようにアイデンティティを変容させるのか?—帰国後の再適応を観察して— 奈良教育大学紀要 人文社会科学, 51, 1-17.
- Ouarasse, A.O. & Van de Vijver, F.J.R. (2005). The role of demographic variables and acculturation

attitudes in predicting sociocultural and psychological adaptation in Moroccans in the Netherlands. *International Journal of Intercultural Relations*, **29**, 251-272.

宋 基燦 (2001). 在日韓国・朝鮮人の「若い世代」の台頭と民族教育の新しい展開 京都社会学年報, **9**, 237-253.

竹尾和子・矢吹理恵 (2006). 在日外国人の名のり行動における関連要因の検討—エスニック・アイデンティティ研究の一視点— 発達研究, **20**, 67-79.

辻本久夫・李 鍾順・殷 宅基・岡本洋之・金 泰泳・金 孝・近藤とみお・洪 浩秀・森木和美 (1994). 親と子が見た在日韓国・朝鮮人白書：在日韓国・朝鮮人と日本人の三つの意識調査 明石書店

田中共子 (2003). 異文化共生における心理学視点から示唆 文化共生学研究, **1**, 63-72.

谷 富夫 (1995b). 在日韓国・朝鮮人社会の現在—地域社会に焦点をあてて 駒井 洋(編)『定住化する外国人』明石書店 pp.133-161.

Viruell-Fuentes, E.A. (2007). Beyond acculturation: Immigration, discrimination, and health research among Mexicans in the United States. *Social Science & Medicine*, **65**, 1524-1535.

Ward, C. (2008). Thinking outside the Berry boxes: New perspective on identity, acculturation and intercultural relations. *International Journal of Intercultural Relations*, **32**, 105-114.

Ward, C. & Kennedy, A. (1994). Acculturation strategies, psychological adjustment, and sociocultural competence during cross-cultural transitions. *International Journal of Intercultural Relations*, **18**, 329-343.

Ward, C. & Rana-Deuba, A. (1999). Acculturation and adaptation revisited. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, **30**, 422-442.

Wiley, S., Perkins, K., & Deaux, K. (2008). Through the looking glass: Ethnic and generational patterns of immigrant identity. *International Journal of Intercultural Relations*, **32**, 385-398.

山崎瑞紀・平 直樹・中村俊哉・横山 剛 (1997). アジア系留学生の対日態度及び異文化態度形成におけるエスニシティの役割 教育心理学研究, **45**, 119-128.

在日本大韓民国青年会 (2009). あんにょん特集自分史在日図鑑 アンニョン **36**, 11-17